

インタープリティブ・プランニングの手法を用いた うまセンターの教育普及計画

415055 久保田 彩心（指導教員：古瀬浩史）

キーワード：フィールドミュージアム/インタープリティブ・プランニング/馬

1. はじめに

2018年現在、帝京科学大学東京西キャンパスでは、フィールドミュージアム構想が進められている。フィールドミュージアムとは、フィールドそのものを博物館として捉え、そこにある事物や事象を博物館の展示物とする概念であるとされている¹⁾。フィールドミュージアムの基本構造として、コアミュージアムとサテライトがある。コアミュージアムは、活動の中心となり企画や実施を司るとともに、サテライトを紹介する場所である。サテライトとは、コアミュージアムの周囲に点在する要素であり、フィールドミュージアムの生きている展示場でもある。文化遺産や自然遺産等が対象となり、解説、解説板などに工夫を凝らすことが望ましいとされている²⁾。

本学のフィールドミュージアムでは、うまセンターやビオトープ、コンパニオンアニマルセンターなどがサテライトとして想定されており、多様な機能を持つことが期待されている。

馬事介在活動センター通称「うまセンター」は、馬をパートナーとした教育、医療、福祉に関する活動を行っている。現在、「ふれあいの日」や「障害者乗馬会」のように、イベント型のプログラムが行われているものの、イベント時以外に訪れた際に馬を学べるような環境が整っておらず、フィールドミュージアムのサテライトとして考えた場合はまだ不十分であると考えられる。

本研究では、うまセンターを本学のフィールドミュージアムサテライトとして位置付けた場合に、どのようなプログラムや取り組みが必要かについてインタープリティブ・プランニングの手法を用いて検討する。

1. 方法

(1) インタープリティブ・プランニング

インタープリティブ・プランニングは国立公園や保全地域、遺産エリア、ミュージアム等における教育普及のための全体計画である。アメリカの国立公園では、国立公園局から示された指針によって、すべての公園ユニットが、同じ手法を用いてインタープリテーションの計画を立案することが求められている。また、この手法は、動植物園などのミュージアムでも広く取り組まれている。インタープリテーション計画には、基本要素として(i)目的、(ii)来訪者に望まれる経験、(iii)テーマ(メッセージ)、(iv)対象者、(v)メディアなどの要素が含まれ、それらの関係性を整理する。また、通常は公園等の管理者だけでなく、利用者や教育関係者など、様々な立場の人の参加によるワークショップによって計画が策定される³⁾。

本研究では、うまセンターをフィールドミュージアムのサテライトと位置づけ、国立公園分野のインタープリティブ・プランニングの手法に基づいて、教育普及活動の計画を立案する。

なお、今回の計画は5年という期間を想定した。

(2) ワークショップ、ヒヤリング

インタープリティブ・プランニングに含まれる、目的、対象者、メディア、テーマなどの要素のアイデアを出した

め、うまセンター委員の学生と職員、障がい者乗馬会学生を参加者としてワークショップを行った。ワークショップで得られたアイデアを材料として、計画案をつくり、さらに関係者にヒヤリングを行った。

ワークショップの実施日

7/20 (メディアの検討)

11/20 (対象者についての整理)

12/16 (来訪者に望まれる経験)

ヒヤリングの実施日

8/5 (メディアの実現性について)

1/16 (コンセプト図の確認)

2. 結果・考察

(1) うまセンターのインタープリティブ・プランニング
インタープリティブ・プランニングの手法により、策定した「うまセンター教育普及計画」を、資料として本稿の末尾に添付した。計画に含まれる主要な要素について下に記述する。

(i) 目的

目的では、うまセンターに関する既存の文書の中からセンターの目的を調査し、それをもとに、うまセンター教育普及の目的を文章化した。

既存文書1「動物ふれあい公園計画(案)」に記述された目的

人と動物との共生を目指して、上野原市民と動物とのふれあいを促進すると同時に、大学の教育研究に資することを目的とする。

既存文書2「帝京科学大学付属博物館規定(案)第2条」に記述された目的

本博物館は、持続可能性な社会の発展に寄与するため、「自然との共生」に関して継承すべき知恵・知識・情報を収集・発見・共有し、本博物館に関わる学生・教員・その他人々に、自由な学習と成長の場を提供することである。

これらをもとに、うまセンターの教育普及の目的を以下のように設定した。

<うまセンターにおける教育普及活動計画の目的>

実際の馬を観察し、直接的なふれあい体験ができることを活かして、馬を介在させたコミュニケーションの機会を創出し、動物や自然について、また「人と動物の共生」について学ぶ機会とする。

(ii) 来訪者に望まれる経験

うまセンターを訪れる人にどのような経験をしてほしいかについて、ワークショップで挙げられた内容を、箇条書きで整理した。

1. 馬の乗るという非日常の体験を通して、馬の温もりを感

- じ、馬と一体になる経験。
2. 馬とのふれあいや世話を体験することで、馬をより観察し、生き物の世話をすることの責任や命を感じる。
 3. 様々の体験を通し馬に関心をもち、馬と人の関わりりの深さについて知るきっかけを持つ。
 4. 馬と関わる学生の活動を知ってもらう。

(iii) テーマ

インタープリテーション計画における「テーマ」とは、公園や施設において伝えたい主要なメッセージを短い文章化したものを指す。「テーマ」はインタープリテーション活動や、教育プログラムの基盤となり、人々に伝えられるべき重要な知識や概念を定義している。

小林（2016）は、馬とのふれあい活動の場での馬に関する学習テーマを検討、整理した³⁾。本論では、それを参考に、フィールドミュージアムの位置づけの中での、うまセンターの教育普及活動の「テーマ」を検討した。テーマは、3つの大項目に分け、各項目に2つのテーマ分を記述した。

人と馬のつながり

- 長い歴史の中で、人は馬と深いつながりを築いてきた。（移動手段、戦争での活用、馬搬や馬耕など）現在も食用からギャンブルまで様々な活用に活用され、馬の価値が見直されている。
- 人と馬のつながりは、草原の維持などの土地利用によって、自然環境にも影響を与えた。

大型草食動物としての馬

- 馬は草食動物である。捕食者から逃れ、生き残るために広範囲の視野を持ち、速く走れることができる現在の姿に進化した。
- 歯や消化器官など、様々な点に草食動物としての特徴をみることができる。

学生活動の発信

- 馬の手入れや厩舎作業、イベントの計画、プログラムの運営等は学生が参加して行っている。
- 動物介在教育や、ホースセラピー、乗馬練習など幅広い活動がある。

(iv) 対象者

うまセンターの教育普及活動の対象者として想定される主要な対象者層を分類、整理した。

- 保育・幼稚園児童
- 小学生
- 親子連れ
- 高校生を含む親子
- 障がいをお持ちの方
- 本学在学学生
- 中学生
- 立ち寄り型利用（親子・大人・大学の来客）

保育園児童や本学在学学生は現在、イベントや実習などで対応できている対象者層であるが、中学生の利用が少ない。また、フィールドミュージアムのサテライトと想定した際には、「立ち寄り型利用」、すなわちイベント等が無い時に短時間利用する方の対応を充実させることを課題となると考えられた。

(v) メディア

ワークショップで得たアイデアをもとに、プログラムや展示など、教育普及のためのメディアの整理を行った。

ノン・パーソナルメディア (N)

ノン・パーソナルメディアは人が直接対応しないもので、主に展示や印刷物のメディアの検討である。

■ノンパーソナルメディア

N1. イベント時に仮設するパネル展示

- N1-1 馬のプロフィール
- N1-2 注意書き
- N1-3 飼料の種類/量/用途
- N1-4 うえのはらと馬

N2. 常時使用する更新型パネル展示

- N2-1 馬の健康状態（学生日誌）
- N2-2 1日スケジュール
- N2-3 馬の運動
- N2-4 馬の社会性
- N2-5 ホースセラピー

N3. 常設的な野外解説板

- N3-1 設立目的・イベント情報
- N3-2 森の番人～人と自然と馬～
- N3-3 働く馬～循環型農業と馬の活用～

N4. 展示

- N4-1 サドルシーソー
- N4-2 馬を活用してできる道具
- N4-3 蹄のあしあと
- N4-4 馬の骨格標本
- N4-5 剥製

N5. 印刷物

- N5-1 うまセンター総合パンフレット
- N5-2 馬に関する手作りパンフレット

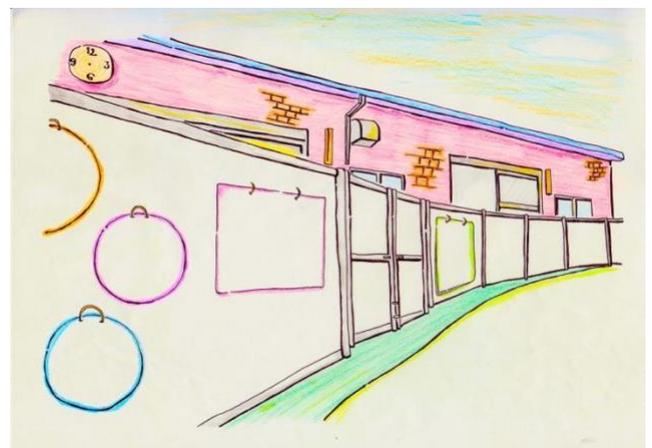


図1. N2. 常時使用する更新型パネル展示

パーソナル・メディア (P)

パーソナル・メディアは人が直接対応する、主にイベントやプログラムの検討である。

■ノンパーソナルメディア

P1. 乗馬・作業体験プログラム

- P1-1 世話体験
- P1-2 馬房掃除体験
- P1-3 曳き馬乗馬体験
- P1-4 外乗コース体験

- P1-5 馬耕体験
- P1-6 馬車体験
- P2.学習プログラム
 - P2-1 うまクイズ
 - P2-2 絵本・紙芝居
 - P2-3 馬糞炊飯
- P3.学生活動の発信と非構成的な解説
 - P3-1 厩舎作業
 - P3-2 畑作業・馬耕
- P4.団体対応
 - P4-1 遠足
 - P4-2 高校生実習受け入れ
 - P4-3 フリースクール
- P5.アウトリーチ・プログラム
 - P5-1 移動うまセンター
 - P5-2 デイサービス
 - P5-3 屋外どうぶつえん
- P6.イベント
 - P6-1 ふれあいの日
 - P6-2 障がい者乗馬会
 - P6-3 オープンキャンパス
 - P6-4 うまキャンプ
 - P6-5 うまカフェ/にんじんカフェ
 - P6-6 うまビアガーデン
 - P6-7 結婚式
 - P6-8 講演会
 - P6-9 ホースショー
 - P6-10 草競馬



図 2. P1-5 馬耕体験



図 3.P6-4 うまキャンプ

4. まとめ・今後の課題

フィールドミュージアムのサテライトとして、うまセンターは馬と人の歴史や自然との共生、馬の価値を学ぶ教育普及の場としての大きな可能性を持っている。そして、立ち寄り型利用の方を想定したパネルや野外解説板などは、多額の予算を考慮せずに対応できると考える。

計画を実践していくためには、ミュージアム設立以降の学生の組織的な再検討が必要かもしれない。ミュージアムのコンセプトを共有し、学生一人ひとりが教育普及を行うという意識の向上も課題とされる。また、馬耕体験や、うまキャンプなどのプログラムでは、土地を利用するにあたり、地権者の承諾や連携も課題になると考えられる。



図 4.教育普及のためのうまセンター全体図

謝辞

本研究にあたり、馬事介在活動センター職員である、喜久村徳叔先生、淵上真帆先生、高野正幸先生、馬事介在活動センター委員学生の皆様、乗馬会委員学生の皆様には、ワークショップや、ヒヤリングへのご協力を頂いた。また、藪田先生から、本学フィールドミュージアム構想に関する文献をいただいた。小川先生からは、馬事介在活動センター当初からの文献を頂いた。これらの方に、この場をお借りして感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 白川勝信：博物館と生態学(4)地域の自然が博物館ーフィールドミュージアムの活動ー,日本生態学会誌 57:273-276(2007)
- 2) 新井重三：エコミュージアム入門：13-16,1995.
- 3) 小林礼佳：馬とのふれあい活動の場で行う馬を学ぶためのプログラムの検討：帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科平成 29 年度卒業研究要旨, 2018

帝京科学大学フィールドミュージアム

うまセンターの教育普及活動計画

環境教育・インタープリテーション研究室
久保田 彩心

目的

計画の位置づけ

うまセンターを本学フィールドミュージアムのサテライトとして位置づけた教育普及計画である。

今回の計画は5年という期間を想定した。

目的では、うまセンターに関する既存の文書を調査し、それをもとにうまセンター教育普及の目的を文章化した。

・🐾 動物ふれあい公園計画（案）目的

人と動物との共生を目指して、上野原市民と動物とのふれあいを促進すると同時に、大学の教育研究に資することを目的とする。

・🐾 帝京科学大学附属博物館規定（案）第2条目的

本博物館は、持続可能性な社会の発展に寄与するため、「自然との共生」に関して継承すべき知恵・知識・情報を収集・発見・共有し、本博物館に関わる学生・教員・その他人々に、自由な学習と成長の場を提供することである。

・🐾 うまセンターにおける教育普及活動計画目的

実際の馬を観察し、直接的なふれあい体験ができることを活かして、馬を介在させたコミュニケーションの機会を創出し、動物や自然について、また「人と動物の共生」について学ぶ機会とする。

来訪者に望まれる経験

教育普及活動がどのように来訪者の身体的、知的、情緒的体験を高めるかを定義したもの。

- ・馬に乗るといふ非日常の体験を通して、馬の温もりを感じ、馬と一体になる
- ・馬とのふれあいや世話を体験することで、馬をより観察し、生き物の世話をすることの責任や命を感じる
- ・様々な体験を通し馬に関心を持ち、馬と人の関わりの深さについて知るきっかけを持つ
- ・馬と関わる学生の活動を知ってもらう

テーマ

「テーマ」はインタープリテーション活動や、教育プログラムの基盤となり、人々に伝えられるべき重要な知識や概念を定義している。

テーマは、3つの大項目に分け、各項目に2つのテーマ文を記述した。

1. 人と馬のつながり

人と馬は深いつながりがある。移動手段、戦争での活用、馬搬や馬耕の歴史をもち、食用からギャンブルまで様々な活用されている。自然とも共生関係にあり、植性や生態系の維持につながる。

2. 大型草食動物としての馬

馬は草食動物である。捕食者から逃れ、生き残るために広範囲の視野を持ち、速く走ることができる現在の姿に進化した。微生物によって作り出されたこの脂肪酸を盲腸や結腸で吸収することによって、馬はセルロースをエネルギー源として利用することができる。

3. 学生活動の発信

うまセンター委員の学生による馬の手入れや厩舎作業、乗馬練習などを毎日行なっている。これらの学生活動を展示の一部として、馬と人の関わりを発信する。

対象者

うまセンターの教育普及活動の対象者として想定される主要な対象者層を分類、整理した。

- ・🌀 保育・幼稚園児童
- ・🌀 小学生
- ・🌀 親子連れ
- ・🌀 高校生を含む親子
- ・🌀 障がいをお持ちの方
- ・🌀 本学在學生
- ・🌀 中学生
- ・🌀 立ち寄り型利用（親子・大人・大学の来客）

<現状と課題>

幼稚園児童や本学在學生等は現在、イベントや実習などで対応できている対象者層であるが、中学生の利用は少ない。また、フィールドミュージアムのサテライトと想定した際には、立ち寄り型利用といった、短時間利用する方の対応を充実させることを課題となると思われる。

メディア

ワークショップでのアイデアをもとに、プログラムや展示など、教育普及のためのメディアの整理を行った。

1. ノンパーソナル・メディア (N)

人が直接対応しないもので、主に展示や印刷物等のメディアである。

N1 イベント時に仮設するパネル展示

・親子連れを対象とした、馬の生物学的分野の展示

N1-1 馬のプロフィール

N1-2 注意書き

N1-3 飼料の種類/量/用途

N1-4 うえのはらと馬

N2 常時使用する更新型パネル展示

・立ち寄り型利用の方を対象とした、馬と学生活動の展示

N2-1 馬の健康状態 (学生日誌)

N2-2 1日スケジュール

N2-3 馬の運動について

N2-4 馬の社会性について

N2-5 ホースセラピーについて

N3 常設的な野外解説板

・立ち寄り型利用の方を対象とした、馬と人の関わりに関する解説板

N3-1 設立目的やイベント情報

N3-2 森の番人 ～人と自然と馬～

N3-3 はたらく馬～循環型農業と馬の活用～

メディア

1. ノンパーソナル・メディア (N)

人が直接対応しないもので、主に展示や印刷物等のメディアである。

N4 展示

・🌀立ち寄り型利用、親子連れを対象としたイベント時の展示や常設展示

N4-1 サドルシーソー

N4-2 馬を活用してできる道具

N4-3 蹄のあしあと

N4-4 馬の骨格標本

N4-5 剥製

N5 印刷物

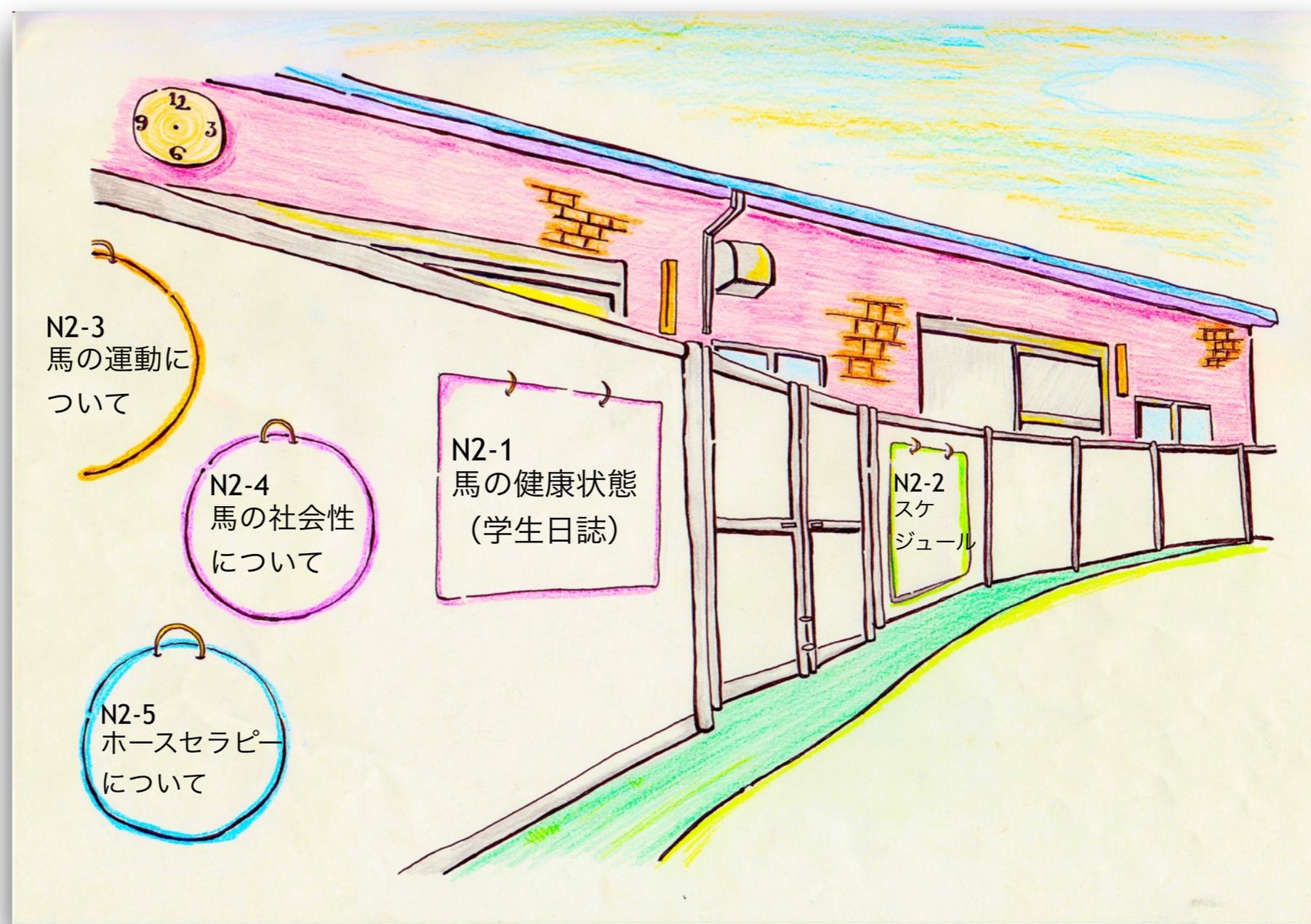
・🌀立ち寄り型利用や、子どもを対象とした印刷物

N5-1 うまセンター総合パンフレット

N5-2 馬に関する手作りパンフレット

N-2 常時使用する更新型パネル展示

- N2-1 馬の健康状態（学生日誌）：日誌の更新を行うことで常に最新の馬の様子分かり、学生の意識向上につながる
- N2-2 1日スケジュール：手入れ作業時間、飼い付け時間、練習内容を更新する
- N2-3 馬の運動について：乗馬、調馬索、曳き馬等の練習に関する展示
- N2-4 馬の社会性について：放牧時の馬同士の関係性に関する展示
- N2-5 ホースセラピーについて：障がい者乗馬会や馬をパートナーとした医療分野についての展示



N3 常設的な野外解説板

N3-1 設立目的やイベント情報：動物ふれあい公園計画目的や、うまセンターにおける教育普及活動計画目的の展示。
ふれあいの日や、うまキャンプなどのイベント情報の更新



N3 常設的な野外解説板

N3-2 森の番人 ～人と自然と馬～：放牧エリアを設けて、植生回復や馬が生態系の管理者であることを解説する展示。



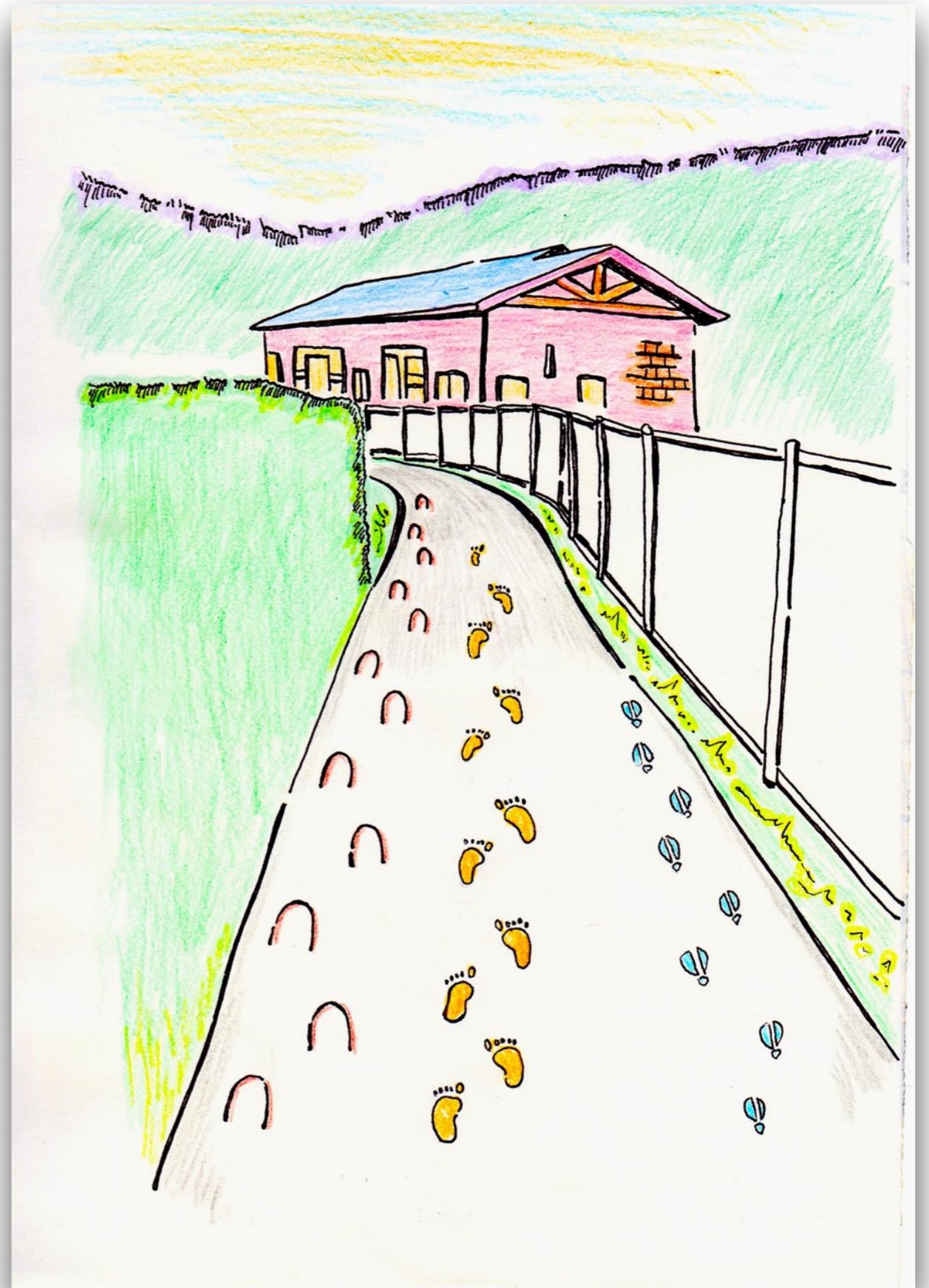
N4 展示

N4-1 サドルシーソー：鞍型のシーソーで、様々な種類の鞍を用意して遊びを通して学習する展示



N4 展示

N4-3 蹄のあしあと：種による足型の違いや、馬の歩様の違いを導線として展示



メディア

2. パーソナル・メディア (P)

パーソナル・メディアは人が直接対応するもので、主にイベントやプログラムである。

P-1 乗馬・作業体験プログラム

・☞ 児童から親子連れを対象とした、馬を扱ったプログラム

P1-1 世話体験

P1-2 馬房掃除体験

P1-3 曳き馬乗馬体験

P1-4 外乗コース体験

P1-5 馬耕体験

P1-6 馬車体験

P-2 学習プログラム

・☞ 児童から親子連れを対象とした、馬に関する学習プログラム

P2-1 うまクイズ

P2-2 絵本・紙芝居

P2-3 馬糞炊飯

P-3 学生活動の発信と非構成的な解説

・☞ 立ち寄り型利用の方を対象とした、学生活動の解説

P3-1 厩舎作業

P3-2 畑作業・馬耕

P-4 団体対応

・☞ 幼稚園・保育園・小学校等の団体受け入れ

P4-1 遠足

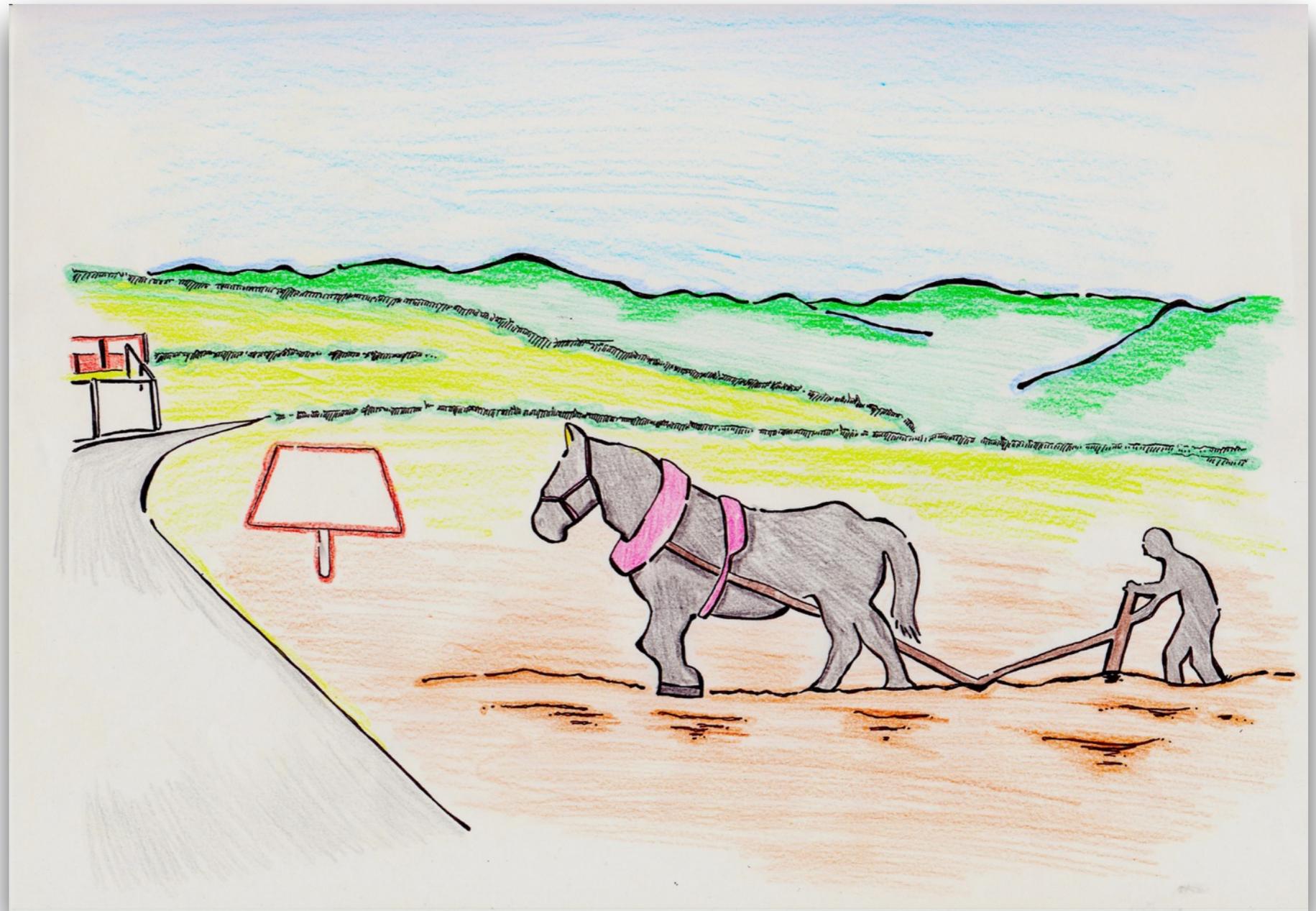
P4-2 高校生実習受け入れ

P4-3 フリースクール

P-1 乗馬・作業体験プログラム

P1-5 馬耕体験 / N3-3 はたらく馬～循環型農業と馬の活用～

・馬耕体験や循環型農業による、馬との歴史や活用について学ぶことを目的とする



メディア

2. パーソナル・メディア (P)

パーソナル・メディアは人が直接対応するもので、主にイベントやプログラムである。

P-5 アウトリーチ・プログラム

・学校団体や、介護施設等うまセンター外でふれあい活動を実施する

P5-1 移動うまセンター

P5-2 デイサービス

P5-3 屋外どうぶつえん

P-6 イベント

・馬の魅力を用了様々なイベントを展開する。

P6-1 ふれあいの日

P6-2 障がい者乗馬会

P6-3 オープンキャンパス

P6-4 うまキャンプ

P6-5 うまカフェ

P6-6 うまビアガーデン

P6-7 結婚式

P6-8 講演会

P6-9 ホースショー

P6-10 草競馬

P-6 イベント

P6-4 うまキャンプ：馬糞炊飯や、駄載、乗馬等ふれあいのみでは足りない馬の価値を学ぶプログラム



対象者とメディアの組み合わせ表

対象者	メディア
親子連れ	ふれあいの日 馬耕・馬車・外乗・うまキャンプ
保育園・幼稚園	ふれあいの日・遠足 絵本・紙芝居・サドルシーソー
小学生・中学生	ふれあいの日・遠足 外乗・馬耕体験・うまキャンプ
高校生を含む親子	オープンキャンパス 馬車・外乗・馬車
本学在学生	実習 講演会・外乗・馬車
障がいをお持ちの方	障がい者乗馬会・ふれあいの日・遠足 アウトリーチプログラム
立ち寄り型利用 (親子・大人・大学の来客)	常設的な野外解説板・印刷物